

「創価大学所蔵 ゲーテ重宝展」報告

—初版本と直筆書簡—

伊藤 貴雄

1 概要

2 展示内容

1) パネル

- I ごあいさつ
- II 展示品について
- III ゲーテの生涯と時代
- IV 特別文化講座「人間ゲーテを語る」より

2) 展示品キャプション

I 初版本

『若きヴェルテルの悩み』1775年

『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』1795～96年

『ゲーテ全集』全61巻 1827～30、1832～42年

II ゲーテ直筆書簡 全9通17頁

- ① 1819年8月15日付 息子アウグスト宛
- ② 同年8月23日付 息子アウグスト宛
- ③ 1820年8月13日付 息子アウグスト宛
- ④ 同年9月7日付 息子アウグスト宛
- ⑤ 1821年10月9日付 息子アウグスト宛
- ⑥ 同年10月21日付 息子アウグスト宛
- ⑦ 1822年8月13日付 息子アウグスト宛
- ⑧ 同年12月27日付 言語学者ツァウパー宛
- ⑨ 1823年8月24日付 息子アウグスト宛

3 開幕式の記録

1) 創価大学鈴木将史学長挨拶

2) ドイツ大使館ゼーンケ・グロートファーゼン文化課長挨拶

- 3) 日本ゲーテ協会元会長・森淑仁氏祝辞
- 4) 創価大学田代康則理事長挨拶
- 5) 創価大学田中亮平副学長による展示品解説

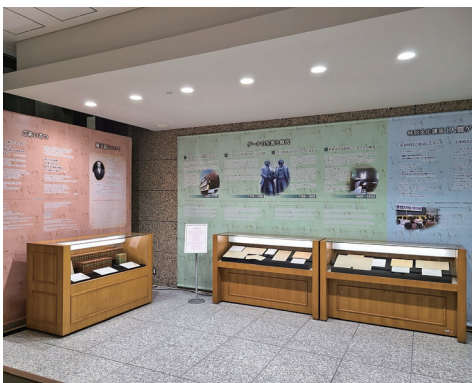
1 概要

2023年12月1日～22日にかけて、『若きヴェルテルの悩み』等の名作で知られるドイツの文豪ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832）に関する貴重資料を展示した、「創価大学所蔵ゲーテ重宝展」が本学中央教育棟1階エントランスにて開催された。

本展示は、2003年3月10日、本学創立者池田大作先生が第1回特別文化講座として、「人間ゲーテを語る」と題して学生を前に行った約90分の講義より20周年の節目を記念するものである。これまで本学が収集してきた、ゲーテの初版本や直筆書簡9通を公開した。

特に書簡は、ゲーテの子どもたちのなかで唯一成人した息子・アウグスト宛のものが多く、ゲーテ晩年の名作『西東詩集』や「マリーエンバートの悲歌」に関連する記述を含むなど、価値の高いものである。日本国内では最多の直筆書簡コレクションであり、うち7通は日本で「初公開」となった（書簡は保存管理の観点からレプリカによる展示）。

本展示の製作は池田大作記念創価教育研究所のスタッフが担当し、田中亮平副学長と筆者が監修に当たった。パネルや展示品キャプションの文章の英訳は同研究所のアンドリュウ・ゲバート教授とトウ・ジェン・チン氏が担当した。パネルや展示品のデザインは（株）ホクトエンジニアリングが担当した。



12月1日に行われた開幕式では、鈴木将史学長の挨拶に続き、ドイツ大使館のゼンケ・グ

ロートフーゼン（Dr. Soehnke Grothusen）一等書記官（文化課長）が本展示会への期待を述べた後、元日本ゲート協会会長の森淑仁東北大学名誉教授からの祝辞を筆者が紹介した。

田代康則理事長は2003年の創立者による特別文化講座「人間ゲートを語る」を振り返り、「創立者が目指された、世界の平和と人々の幸福という遠大な目標を、私たちが受け継いでまいりたいと思います」と語った。

テープカットの後、ゲートの詩「野ばら」によるシューベルトとヴェルナーの歌曲が、足立広美教育学部准教授と学生により演奏された。また、創立者の「人間ゲートを語る」のハイライト上映が行われ、田中亮平副学長が展示品を解説した。



なお、本展示と開幕式の模様は、12月2日付の『読売新聞』朝刊（多摩版）、『毎日新聞』朝刊（多摩版）、『聖教新聞』（全国版）にも掲載された。

以下、記録として、展示内容（パネルと展示品キャプションの文章）、および開幕式での各登壇者の挨拶を紹介する。

2 展示内容

1) パネル

I ごあいさつ

頭と胸の中が激しく動いていることより
結構なことがあるか！

もはや愛しもせねば、迷いもせぬものは、
埋葬してもらおうがよい。

（高橋健二訳『ゲート詩集』より）

生きている限り、愛すること、迷うこと、葛藤は当然なのだ、
ゲートは人に寄り添い、肯定する。

創立者は19歳の頃、この一節を「読書ノート」に書き留めた。

詩人、劇作家、政治家、科学者と多彩な活躍を見せたゲーテ。
家族を次々と失うも、生と死を見つめ、苦悩を芸術へと昇華させた。
創立者は、戦争で兄を亡くし、自身も結核を病むなか、
ゲーテの言葉に深い共感を寄せたと考えられる。

その後も、海外の識者との対談、青年への激励など、
折に触れてゲーテを引用し、
その世界観を通して、人類の未来を展望してきた。

2003年3月、創立者は学生・教職員・理事会の要請を受けて、
「人間ゲーテを語る」と題する約90分の講義を行った。
講義とはいえ、何かを論じるのではない。
激動の人生を生き抜いた「人間」をテーマに、率直に「語った」。

民も下べも征服者も
みな常に告白する。
地上の子の最高の幸福は
ただ人格だけであると。 (同上)

人生の目的は、人格という最高の幸せを作ることにあり、
そのために学び続けてもらいたい——。
卒業を前にした学生一人一人への、創立者のあたたかなエールであった。

この特別文化講座より20周年の意義をとどめ、
本学所蔵のゲーテの初版本や直筆書簡を公開する。
文豪のみずみずしい創造の息吹きに触れ、
明日への活力を得るきっかけとなれば幸いである。

創価大学

II 展示品について

この展示では、本学所蔵のゲーテに関わる貴重な品を公開する。

『若きヴェルテルの悩み』

1775年 初版第2刷

『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』

全4巻 1795～96年 初版

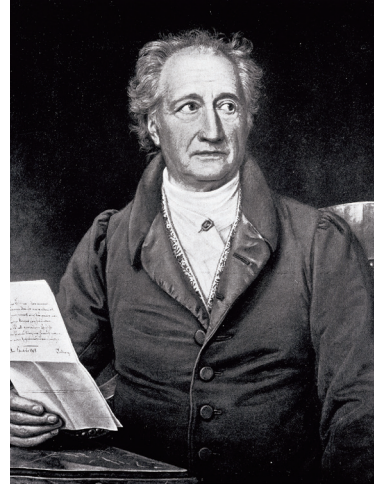
『ゲーテ全集』 全61巻 (ポケット版)

1827～30年、1832～42年 初版

いずれの書籍もゲーテ存命中に刊行されたものである
(『ゲーテ全集』の後半20冊は死後刊行)。

ゲーテ直筆書簡 全9通 17頁

1819～23年 (うち7通は本邦初公開・レプリカ)



9通の書簡(手紙)は、ゲーテの子どものうち唯一成人した息子・アウグスト宛ものが多く、内容も晩年の名作である『西東詩集』や「マリーエンバートの悲歌」に関連する記述を含むなど、歴史的に貴重なものである。日本に現存するゲーテの直筆書簡は、他に東京大学、京都外国語大学、天理大学等を合わせて6通あることが知られている¹。

2015年からは、ドイツを中心に諸研究機関が、世界約200箇所に現存するゲーテ直筆書簡の所蔵・分布情報についてデータベースを構築しつつある。また、ドイツのゲーテ＝シラー文書館では現在、全38巻に及ぶ『ゲーテ書簡全集』を編集・刊行中である²。

ゲーテの文通相手は、文学・芸術のみならず、哲学・科学・政治など様々な分野にわたる当時の重要人物を網羅しており、ゲーテの書簡は18世紀後半～19世紀前半のヨーロッパ史を知る上で第一級の研究資料となっている。

Ⅲ ゲーテの生涯と時代

◇『若きヴェルテルの悩み』でデビュー 1749～1775

1749年8月、ドイツ・フランクフルトの商家に生まれる。教育熱心な父と、よく物語を作り聞かせていた母の影響で、演劇や物語の創作に親しむ。

病気療養を経て、シュトラスブルク大学で法律を学ぶ傍ら、文芸評論家ヘルダーとの出会い、少女フリーデリテとの恋愛で、「野ばら」「五月の歌」などが謳われ、詩人としての歩みが始まる。

弁護士としてヴェツラーの町で研修に訪れていた際、小説『若



フランクフルト ゲーテの生家
Frankfurt, Birthplace of Goethe

¹ 石原あえか「日本に現存するゲーテ書簡——調査報告と再発見」東京大学ヨーロッパ・ドイツ研究センター発行『ヨーロッパ研究』第22号、2023年、105-112頁。

² 同上、106頁。

きヴェルテルの悩み』のヒロインのモデルとなる女性シャルロッテと出会い、思いを募らせた。自身の情熱的な感情と社会への不満を自由に表現したこの小説は全ヨーロッパを熱狂させた。

◇ヴァイマル公国・政治家としての活躍 1775～1788

その後、公爵カール・アウグストの招待で、ヴァイマル公国の政治に携わる。庶民の生活のため紡績や編み物の学校を設立し、灌漑施設を整え、税負担の軽減や、兵力の削減も行った。同時期に自然研究を開始し、動物学、解剖学、気象学へと関心を拡大する。人間の顎間骨を発見し、医学でも功績を残した。

しかし、公国の財政を豊かにし、庶民の福祉に寄与したいとの念願は、既得権益からの抵抗にあい、挫折を余儀なくされる。詩作の上でも未完成の作品が増えていき、詩人として、人間としての再生を求めて、単身イタリアへと旅立つ。

イタリア滞在中に戯曲『エグモント』を完成し、ライフワークとなる『ファウスト』を書き進めるなど、意欲的に創作活動が行われ、詩人として再生を果たした。

◇ドイツ文化界の巨人・シラーとの交友 1788～1805

ヴァイマル帰国後、妻となるクリスティアーネと出会い、息子アウグストが誕生する。愛情に満ちた生活も束の間、フランス革命が勃発し、アウグスト公爵のもとで従軍。革命に対する社会の反応を作品に残した。

1794年、「歓喜の歌」の作者として知られる詩人フリードリヒ・シラー（1759～1805）との交友が始まり、シラーが46歳で病没するまで約11年間続く。シラーの助言を受けながら、長編小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』や、叙事詩の傑作『ヘルマンとドロテア』を完成させる。

二人の友情はドイツ文学の黄金時代をもたらした。その往復書簡は1000通を超え、日本語訳も出版されている。



ゲーテとシラーの像

◇世界文学の提唱——ゲーテの晩年 1805～1832

シラーの死後、ゲーテは「私の存在の半分を失った」と悲しむが、翌年、シラーの督励を受けて書いた『ファウスト』の第一部を完成させ、亡き友との宿願を果たす。

相次ぐ戦乱の中でも学問と芸術に勤しみ、『色彩論』を完成させ、近代自然科学の方法論へ一石を投じた。さらに自伝文学『詩と真実』、従軍体験をつづった『滞仏陣中記』など、自身の精神的発展をたどる作品を残す。

また、ヨーロッパ諸国の最新文学のみならず、インドや中国の文学にも翻訳を通じて親しみ、

偏狭なナショナリズムを乗り越える「世界文学」を提唱した。妻と息子の死という悲しみに直面するも、余命と闘うように創作に向かい、『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』や『ファウスト第二部』を完成させる。

1832年、風邪をこじらせ、椅子に座ったまま82歳で生涯を閉じる。臨終の言葉は、「もっと光を」であったとされる。



ヴァイマルのゲーテの家

Ⅳ 特別文化講座「人間ゲーテを語る」より

◇青春時代に愛読したゲーテ

まず、私が青春時代から好きだったゲーテの言葉を贈りたい。

「誠実に君の時間を利用せよ！

何かを理解しようと思ったら、遠くを探すな」

(『ゲーテの言葉』高橋健二訳編、彌生書房)。

これは、私の座右の言葉でした。

さらにゲーテは言います。

「まことに、青春というものは、ありあまるほどの多くの力を内蔵している」

(『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』、『ゲーテ全集』7、前田敬作・今村孝訳、潮出版社)

生き生きと、青春を生きる人間ほど偉大な人間はいない。強いものはない——

これがゲーテの誇り高い生き方でした。

自分が決めたこの道で、これから一生涯、戦ってみせる。その原動力は、青春にある——

こう決めて、私も青年時代を生き抜きました³。

◇主体的な決意の大切さ

文学の翼を、自ら鍛え広げよう——学生時代、ゲーテはひそかに決心する。文で人の心を動かそう。文で世界に波動を広げよう。新しい時代をつくろう。

自分がやってみよう——そう決めるところから、一人の偉大な人間革命が始まる。

そのためゲーテは、学生時代、文芸や化学、言語、歴史など、あらゆる領域の学問を貪欲に吸収していく。民衆の幸福のため、永遠の平和のために、自分は世界を動かすんだ。人の心を動かす人間になるんだ——こう決めた人間は強い。諸君は、そうあってもらいたい⁴。

◇自分自身の骨格を築く

20歳前後は一番大事です。多くのことが、ここで決まる。私の体験からも、そう言えます。

³ 池田大作「人間ゲーテを語る」『特別文化講座』創価大学、2006年、8頁。

⁴ 同上、18頁。

「自分自身の骨格を築く」ことが、学生時代、青年時代の一つの目的であることを忘れてはなりません。

後に、75歳のゲーテは、進路の相談に訪れた青年に対して、「重要なことは」「けっして使い尽くすことのない資本をつくることだ」（エッカーマン『ゲーテとの対話』山下肇訳、岩波文庫）と論じ、その青年にふさわしい道へと導いていったことも有名な話です。

このことを、よく思索してもらいたいです。

青年は、自分自身の目的を真剣に見つめよ。

そのためのゆるぎない土台を完璧につくれ。

これもまたゲーテの人間学の一つでしょう⁵。

◇ゲーテの最後の言葉

ゲーテの最後の言葉は、「もっと光を」であったと伝えられる。これは、実際は「部屋のよろい戸を開けて、もっと光が入るように」との意味であったとも解釈されている。

それはそれとして、この言葉について、師である戸田先生は、私に語られていた。

『「もっと光を」という一言からは、『もっと世界を見つめたい』『もっと世界から学びたい』『もっと世界と対話したい』、さらに『もっと世界のために生きて、そして、もっと世界のために行動したい』とのゲーテの生命の奥底からの叫びが、聞こえてくるようではないか』

それが、師弟の語らいの結論でありました⁶。

2) 展示品キャプション

I 初版本

『若きヴェルテルの悩み』 1775年 初版第2刷

Leipzig, Weygandsche Buchhandlung, 1775. 2v.in1

ゲーテ 25歳の時の中編小説。青年ヴェルテルが婚約者のいる女性シャルロッテに恋をし、かなわぬ思いに絶望して自殺するまでを描く。主人公の書簡を連ねることで、間接的にストーリーが展開する形式をとっている。

出版当時、ヨーロッパ中でベストセラーとなり、主人公を真似て自殺する者まで現れた。ナポレオンが7回通読したというエピソードは有名である。

この作品はゲーテの実体験に基いている。彼自身は、主人公の激しい気持ちや葛藤、失恋を自由に表現し小説の形にすることで、危機を乗り越えたと述べている。現在も世界中で広く読まれ、



⁵ 同上、24頁。

⁶ 同上、36頁。

日本では漫画化されるなど、青春小説として今なお愛されつづけている。

『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』 1795年～1796年 初版

Belin, J. F. Unger, 1795-1796, 4v

ゲーテが47歳の時の長編小説。青年ヴィルヘルムが旅回りの劇団に加わり、多くの人々と交流するなかで、恋愛、友情、師弟関係をとおして一人の人間として成長していく様子を描く。のちに続編『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』（1829年）も書かれた。

それまでの小説は、一つの事件・出来事に焦点を当てて描くものが多かったが、ゲーテは本作で一人の人間の成長過程を一大長編として描き、「教養小説」（ビルドゥングス・ロマン）という新しいジャンルを生み出した。

伝記風であり群像劇風でもあるこの形式は、ロマン・ロラン、トーマス・マン、ヘルマン・ヘッセをはじめとする後世の作家たちに受け継がれた。20世紀の大河小説の原型ともいえる。



『ゲーテ全集』全61巻 1827～30、1832～42年 初版（ポケット版）

Stuttgart, Tübingen : J. G. Cotta'sche Buchhandlung, 1827-1830, 1832-1842

ゲーテ自身によって監修された生前の決定版全集。後半の20冊は、ゲーテの死後の1832～42年にエッカーマンとリーマーによって編集された補遺。

〈内容〉

第1～4巻 詩集

第5～6巻 西東詩集

第7～15巻 戯曲（エグモント、ファウスト第1部等）

第16巻 若きヴェルテルの悩み

第17巻 親和力

第18～20巻 ヴィルヘルム・マイスターの修業時代

第21～23巻 ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代

第24～26巻 詩と真実



第 27～29 卷 イタリア紀行

第 30 卷 滯仏陣中記

第 31～32 卷 年代記

第 33 卷 書評

第 34～40 卷 芸術論など

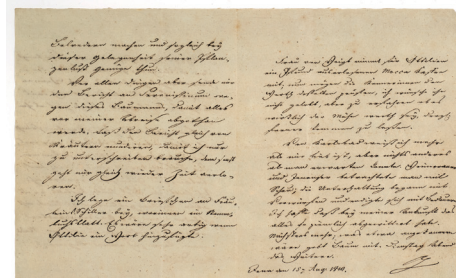
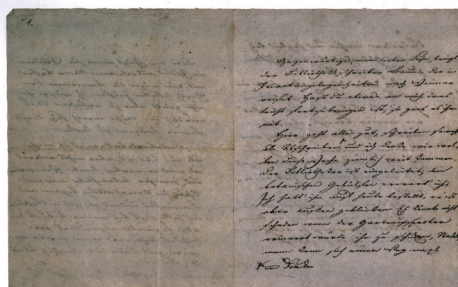
第 41～60 卷 補遺（ファウスト第 2 部等、死後刊行）

II ゲーテ直筆書簡 全 9 通 17 頁

9 通のうち、1 通は言語学者ツァウパーへの手紙であり、残りの 8 通はすべて息子のアウグストに宛てたものである。ゲーテには 5 人の子どもがいたが、成人まで成長したのはアウグストだけで、他の子どもたちは途中で生命を落としている。いずれも、「G」のサインがあり、ゲーテ晩年の代表作である『西東詩集』や、「マリーエンバートの悲歌」に関連する内容も記されており、歴史上貴重なものである。

- ① 1819 年 8 月 15 日付 息子アウグスト宛
- ② 同年 8 月 23 日付 息子アウグスト宛
- ③ 1820 年 8 月 13 日付 息子アウグスト宛
- ④ 同年 9 月 7 日付 息子アウグスト宛
- ⑤ 1821 年 10 月 9 日付 息子アウグスト宛
- ⑥ 同年 10 月 21 日付 息子アウグスト宛
- ⑦ 1822 年 8 月 13 日付 息子アウグスト宛
- ⑧ 同年 12 月 27 日付 言語学者 ツァウパー宛
- ⑨ 1823 年 8 月 24 日付 息子アウグスト宛

書簡① 【初公開】 息子アウグスト宛 1819 年 8 月 15 日、イェナにて



8 月 26 日、70 歳近いゲーテは、治療のために温泉地カールスバート（現チェコのカルロヴィ・ヴァリ）に向かった。この書簡はその 11 日前のものである。書簡の中でゲーテは、当時ドイツ連邦 10 か国がカールスバートで行っていた会議について触れている。この会議はウィーン体制

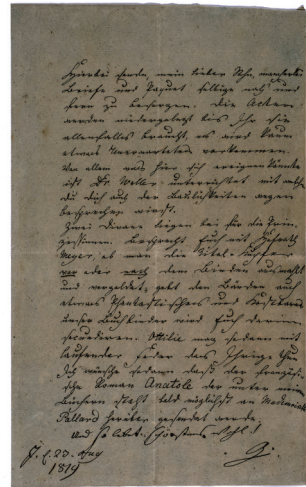
の中心人物メッテルニヒが主導したもので、ドイツ連邦内の自由主義運動や民族主義運動を弾圧することを目的としていた。ヴァイマルとイエナからの会議参加者は自由主義的な政策に賛成していた。その後9月20日に、いわゆる「カールスバートの決議」が可決されることになる。

「(前略) カールスバートについては、私が望む以上のことは知っているが、期待以上のことは何もない。ヴァイマルとイエナからの参加者は畏敬の念をもって見られた。話し合いは非難で始まり、後悔で終わった。私が到着するころには、このようなことがすっかり消えていることを願っている。(後略)」

書簡② 【初公開】 息子アウグスト宛 1819年8月23日、イエナにて

書簡①の8日後に書かれたもの。ゲーテは自作の『西東詩集』をカール・アウグスト公の孫娘マリーとアウグステに謹呈することについて述べている。

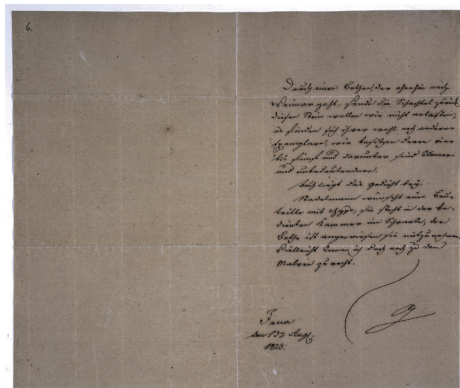
「(前略) 王女たち(マリーとアウグステ)用に『西東詩集』を2冊同封する。製本の前か後かに、タイトルページの銅版画に彩色と金箔を施すかどうかについて、マイヤー顧問官と相談してほしい。オットーリエ(ゲーテの息子アウグストの妻)はペンを走らせて自分の役目を果たすだろう…。それでは、よい旅を! G.」



書簡③ 【初公開】 息子アウグスト宛 1820年8月13日、イエナにて

この書簡はゲーテ70歳のときのものである。彼は鉱物学も研究し、生涯にわたり岩石採集も行っていた。

「ワイマールに行く使者に頼んで、箱を送り返してほしい。この石には食指が伸びない。この石の代わりになるものは他にもあるだろう。私たちは4、5個所有しているが、その中にはもっと小さくて重要なものがある。(後略)」

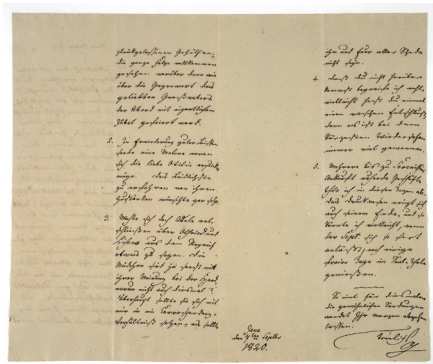
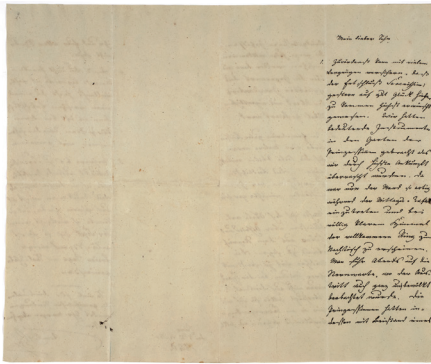


書簡④ 息子アウグスト宛 1820年9月7日、イェナにて

書簡③の翌月に書かれたもの。ここではゲーテがカール・アウグスト公やその孫娘たちと、日食を見たことが述べられている。

「(前略) 私たちが王女たちの庭に大切な楽器を運んでいたとき、尊貴な方(カール・アウグスト公)の到着に驚かされた。月は大変親切で、昼食のさなかに太陽に重なり始め、食後のデザート有的时候には、晴れわたる天空に完璧な金環として現れた。

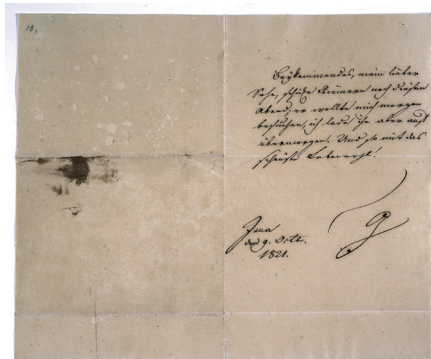
夕方には天文台に行き、雲ひとつない月の出を観測した。この間、王女たちは残った助手の助けを借りて、その一部始終を完璧に見ていた。おかげでその晩は、まるで愛する祖父(カール・アウグスト公)が来てくれたかのように、大喜びで祝われた。(後略)」



書簡⑤ 【初公開】 息子アウグスト宛 1821年10月9日、イェナにて

この書簡はゲーテ72歳のときのものである。ヴァイマルのギムナジウム教授で図書館司書補のフリードリヒ・ヴィルヘルム・リーマーに関係するものと思われる。彼はゲーテの息子アウグストの家庭教師だった。

「親愛なる息子よ、以下のものを今晚リーマーに送ってほしい。彼は明日私を訪ねたがっていたが、明後日まで延期する。どうかご機嫌よう！」



書簡⑥ 【初公開】 息子アウグスト宛 1821年10月21日、イエナにて

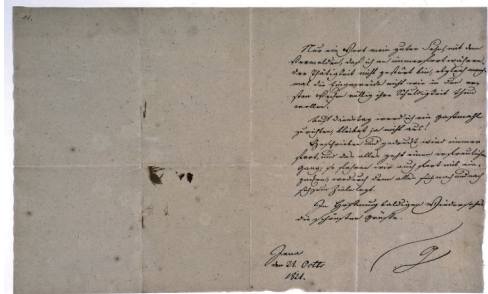
書簡⑤の12日後に書かれたもの。ゲーテはここで仕事が順調に進んでいることを報告している。彼はこの頃、自身が編集する芸術と学問のための雑誌『芸術と古代』に従事していた。

「息子よ、私の絶え間ない活動に支障はないが、最初の数週間のようにには内臓が仕事をしなくなる時もある。

火曜日には客を招いての食事がある！

執筆と印刷はまだ続いており、すべて順調に進んでいる。

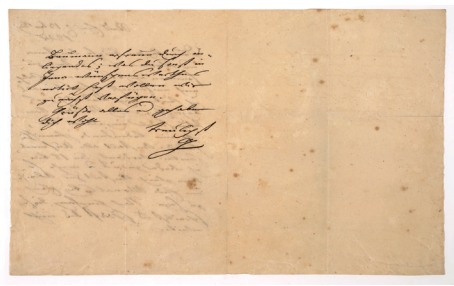
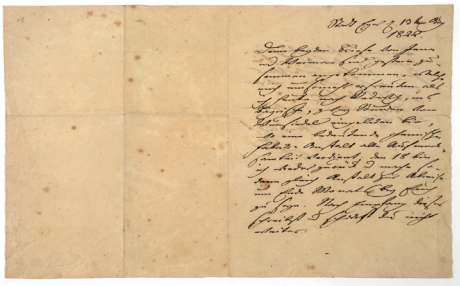
また近いうちに会えることを願っている。」



書簡⑦ 【初公開】 息子アウグスト宛（全文直筆） 1822年8月13日、エーガーにて

ゲーテ 72 歳のときの書簡である。これが書かれた場所であるエーガー（現チェコのヘブ）は、温泉地カールスバートから北西 40 キロの位置にある。手紙⑧もこの地で書かれることになる。

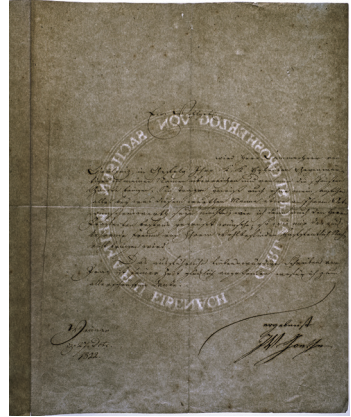
「昨日、イエナとヴァイマルから 2 通の手紙が一緒に届いた。今日、ヴンシーデルから 2 時間のところにあるバイエルン州レトヴィッツに招待されたので、なおさら嬉しく思う。そこには注目に値する非常に重要な化学工場がある。私は 18 日に戻り、今月末にお前のところに行くためにすぐに出発の手配をする。これを受け取ったら、もう手紙を書いたり送ったりする必要はない。（後略）」



書簡⑧ 言語学者ツァウバーへの手紙 1822年12月27日、ヴァイマルにて

「J・W・v・ゲーテ」という署名の入った書簡。紙にはカール・アウグスト大公の肖像の透かしが入っている。このことから、公文書として書かれたことがうかがえる。

ピルゼン（現チェコ共和国のプルゼニ）の中等学校教授であった言語学者ヨーゼフ・スタニスラウス・ツァウパー（1784-1850）に宛てたものである。ツァウパーは1821年、『ゲーテ作品から発展したドイツの理論的実践的詩学の根本的特徴』を出版していた。

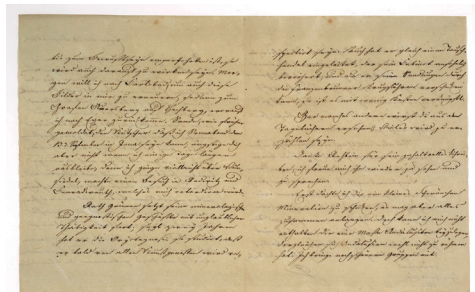
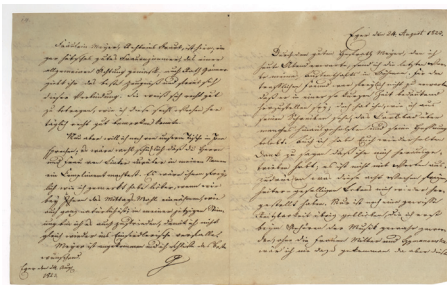


手紙では、ツァウパーに、ヴァイマルの侍従長であったフリードリヒ・アウグスト・v・ボイルヴィッツを紹介している。このときボイルヴィッツは、ヴァイマル大公夫妻がロシア皇帝アレクサンドル（大公の妻マリア・パヴロヴナの兄）に会うためエーガー（現チェコ共和国のヘブ）へ向かう際に、同行していた。

書簡⑨ 【初公開】 息子アウグスト宛 1823年8月24日、エーガーにて

ゲーテ73歳のときの書簡である。二人の女性が奏でる音楽を聴いて、ゲーテは愛するウルリケ・フォン・レヴェッツォーとの思い出にさいなまれた。手紙を書いた翌日、ゲーテは彼女に会うためにカールスバートに向かうが、彼の愛は叶わなかった。有名な「マリーエンバートの悲歌」はその帰路の9月に書かれたものである。

「(前略) この8週間の自由で陽気で社交的な生活がいかに私を回復させたか、言葉で表現するのは不可能だ。ある種の苛立ちだけが残っているが、それは音楽を聴いて初めて気づいたことだ。ミルター（歌手）とシマノフスカ（ピアニスト）の二人の女性がいなければ、私は決してこのような気持ちになることはなかつただろう。しかし、これが意識にまで高まった以上、取り組まなければならないだろう。明日はカールスバートに行って、私の中のこれらの印象を更新したい（後略）」



3 開幕式の記録

以下は2023年12月1日に創価大学中央教育棟1階エントランスロビーで行われた开幕式での各登壇者の挨拶である。

1) 鈴木将史学長

只今ご紹介をいただきました、創価大学学長の鈴木です。

本日、このように盛大に創価大学所蔵「ゲーテ重宝展」のオープニング・セレモニーを開催することができ、心より嬉しく存じます。

ドイツ大使館文化課長のゼーンケ・グロートフーゼン（Dr. Soehnke Grothusen）一等書記官をはじめ、ご列席の皆様に対して、重ねて御礼を申し上げます。

去る11月15日、本学創立者の池田大作先生がご逝去されました。衷心よりご冥福を申し上げますとともに、多くの皆様よりご弔意を賜りましたことに、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

今回の展示は、創立者が2003年に本学で講義をされた、特別文化講座「人間ゲーテを語る」から20周年を記念するものです。このときの模様については、セレモニーの後半で、一部を映像にてご紹介いたします。

創立者は、学生の皆さんと同じくらいの年齢のときから、ゲーテに傾倒しておられました。それは終戦後の1947年から48年頃、創立者が19歳から20歳にかけての時期であったようです。

その後も創立者は、『私の人物観』（1978年）、『私の人間学』（1988年）、『続・若き日の読書』（1993年）など、多くの著作でゲーテを論じてこられました。1995年にはスペインの「アテネオ文化・学術協会」において、「21世紀文明の夜明けを一ファウストの苦悩を超えて」と題する講演をしておられます。

こうした業績から、創立者は2009年に、「ゲーテの最大の理解者であり、平和と人道に尽くしてきた」人物として、ドイツの「ヴァイマル・ゲーテ協会」から特別顕彰を受けられました。今年はこの顕彰から15年目に当たります。

さて、本学は、人類の平和・文化・教育に貢献した人物に関する貴重資料を収集して参りました。これは、人類の知的遺産を守るとともに、未来を担う学生の教育に役立てていきたいとの趣旨からです。今回は、その貴重資料の中から、ゲーテの初版本や直筆書簡などを公開いたします。

創立者は、ゲーテについて、その汲めどもつきぬ文学的な創造性もさることながら、「世界市民」としての生き方を高く評価しておられます。この創造的な「世界市民」という理念は、いまだ戦争と混乱から脱していない現代世界にあって益々重要なものであることは疑いありません。

学生・教職員、市民の皆様におかれましては、今回の展示を通して、ゲーテの精神に触れ、明日への英気を養うひとときにしていただけるよう願っております。

以上をもちまして、ご挨拶とさせていただきます。誠にありがとうございました。

2) ドイツ大使館ゼーンケ・グロートファーゼン文化課長挨拶

尊敬する鈴木学長、田代理事長、森名誉教授、ご参加の皆様。

ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテは卓越した詩人だけでなく、科学、政治、そして良く知られた文通の人でした。彼は生涯に約5千通の手紙を書いたと言われています。そのうち1,015通はゲーテの友人、フリードリヒ・シラーとの書簡であり、ドイツ文学史においても重宝とされています。

ゲーテとシラーはドイツ文学の黄金時代、ワイマール古典における「詩人王子」と言われています。そのため、この度の「創価大学所蔵 ゲーテ重宝展」にて展示される9通の手紙は、文化を愛するどのドイツ人の心をも躍らせる展示です。また、ゲーテが成人まで生き抜いたただ一人の子供、息子アウグストに宛てた美しい言葉を見ることができ、深く感動しています。これ以外にも、今回展示されている数々の品は言うまでもなく大変貴重なものです。

1774年に書かれた小説『若きヴェルテルの悩み』は、ロマン主義を拓いた文書の一つです。そして、小説『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』は、「ビルドゥングス・ロマン」というジャンルの傑作であり、このジャンルは今でもドイツ語で世界的に知られています。

「ビルドゥング (Bildung)」とは、「教育」と不完全にしか訳せない言葉ですが、ゲーテの思想において最も重要な概念であったと言えます。「ビルドゥング」とは、彼にとって、自分の人格の真の豊かさや幸福を発見し、社会や宇宙との神聖な調和を実現するための人生を歩むことでありました。

創価学会の元会長、そして創価大学の創立者である池田大作氏が2003年に行った「人間ゲーテを語る」の特別講座も、こうした思いから生まれたものだったように思います。改めて、ドイツ大使館を代表し、このたびの池田大作氏のご逝去に際し、学生、教職員の皆様に心よりお悔やみ申し上げます。

最後に、ゲーテの教育に対する思想に触発された池田氏が、ゲーテに関する特別文化講座を行われてから20周年となるこの時にこの度の展示を実現することは、池田氏への敬意を表すとともに哀悼を捧げるものでもであると申し上げ、私の挨拶といたします。この度はご招待いただき大変にありがとうございます。

3) 日本ゲーテ協会元会長・森淑仁氏（東北大学名誉教授）祝辞

この度は貴創価大学の創設者池田大作先生のご訃報に接し、大いなるご功績を思い、深く哀悼の意を表しますと共にご冥福を心からお祈り申し上げます。

ご講演の二十周年を記念して開催されましたこの「ゲーテ重宝展」において、集えるもの皆が貴重な資料を目の当たりにし、ゲーテ時代、ゲーテに思いを馳せることができますことはまことに有難く心から感謝いたします。

ドイツ啓蒙期の精神的発展は、カントの批判哲学とゲーテがいわば二つの焦点として展開したとも語られました。ルドルフ・オイケンは、「現象と物自体を明確に区別する」カントと「世界

を現象と存在に引き裂くことはできない」ゲーテとがこのように「一時代の努力として相まみえた」ことに大いに注目しました。

ゲーテの思念の根本は、彼が七年間の長きにわたり刊行した論集「形態学のために」に掲げられた「有機的自然の形成と変成」(Bildung und Umbildung organischer Naturen)に明確に表され、「自然を抱き自然に抱かれつつ」展開し人間においてその最高の実現を見る「人間学」であり、「フマニテート」の普遍的理想の実現に結実するものと考えます。こうしたゲーテを俟って初めて当時の、近代のルネッサンスともいうべき、多方面の生産的な精神的活動の活舞台が成立したと言えましょう。

藝術家は、「第二の自然、感じられ、考えられた、人間的に完成された自然である」藝術を、「感謝を込めて自然に返す」とゲーテは述べています。こうした「自然との呼応関係」、「自然との結びつき」は、『若いヴェルテルの悩み』から晩年の『ファウスト』の完成に至るまで一貫したものであり、「宗教、社会、そして文化科学の領域で、十九世紀の体験領域をはるかに越える創造的に新しい形式と認識をもたらし」、「一九〇〇年頃、またその後になってやっと『親和力』、『西東詩集』、『ファウスト第二部』理解の機が熟した」と文学史に述べられています(フリッツ・マルティナー)。

ゲーテの作品は自然そのものと同じく広くまた深く、詩句(『献詩』)に謳われておりますように「不安な地上の思いを沈め」、「昼をやさしく、夜を明るく」してくれるものでありますが、それは作品を享受する側如何にかかっていることでもあり、またその機も熟さなくてはなりません。「霊の世界は閉ざされているのではない、/ 汝の耳目がふさがり、汝の心が閉ざされているのだ！」(Die Geisterwelt ist nicht verschlossen; / Dein Sinn ist zu, dein Herz ist tot!)と、古の賢者が弟子に向けて語った『ファウスト第一部』の一節(V.403-4)が思い出されます。

今回の記念「ゲーテ重宝展」が、ゲーテの息吹に直接接し、ゲーテが今日何を語るかを再考する機会をわれわれに与えられましたことの意義は実に大きく、開催のご尽力にあらためて深く敬意と感謝申し上げます。

4) 田代康則理事長挨拶

只今ご紹介をいただきました、創価大学理事長の田代でございます。

本日はご多忙の中、創価大学所蔵「ゲーテ重宝展」のオープニング・セレモニーにお越しくださり、誠にありがとうございます。また、祝辞をくださった、ドイツ大使館ゼンケ・グロートフーゼン一等書記官様と森淑仁先生に心から感謝いたします。

11月15日、創立者池田先生がご逝去されました。創立者は本学が1971年に開学してより53年間、「学生第一」との精神を掲げられ、常に励ましの第一線に立ってこられました。

開学3年後、今から50年前の1973年に、第1回夏期大学講座という一般市民の方を対象にした講座がございました。このとき創立者は、「文学と仏教」と題して講演され、『万葉集』、『源氏物語』、『徒然草』と仏教の関係性について、講演されました。また、入学式や卒業式などで、世

界の文豪の言葉を引用して、学生に励ましを贈られました。トルストイやピクトルユゴー、ホイットマン、そして、ゲーテも、創立者が大好きな文豪の一人でした。

そして、今から20年前の2003年3月10日、学生に対して特別文化講座「人間ゲーテを語る」と題して、約90分の講義をされました。会場は、本部棟のM401教室と同時放送で、隣の402教室で行いました。このときは、卒業を控えた4年生中心に参加して、社会に飛び立っていく学生にエールを送られました。

当時、本学は開学から30数年が経ったところで、創立者はこれからは、創価大学を「第二の草創期」として、また新たな気持ちで、建設していこうと呼びかけられていました。このころ何度も来学され、授業参観をされたり、出会った一人一人の学生に温かい励ましの言葉をかけてくださっていました。

特別文化講座「人間ゲーテを語る」は、その創立者の思いと、創立者を慕う学生の思いが結実したものであり、新たな本学史の一ページが刻まれた日となりました。

人間ゲーテ。それは創立者が恩師・戸田城聖先生と出会った青春時代、座右の一書とした文豪でありました。

「若きゲーテたる皆さん、こんにちは！」

「今日は難解なものではなく、できるだけ、わかりやすく、皆さんが

『ああ、楽しかった』『疲れがとれた』と満足できるような講義にしたい」と語られた創立者の眼差し、その声が、慈父のごとく、学生を包まれたことが昨日のように思い出されます。

この講座から20周年を記念し、本日、本学所蔵のゲーテの初版本や直筆書簡などを「ゲーテ重宝展」として公開することにしました。そのご報告を、事前に創立者にしましたところ、11月1日に「皆さん宜しくお伝え下さい」とのご伝言をいただきました。

創立者の目指された、世界の平和と人々の幸福という遠大な目標を、私たち後継のものが、共に、新たな想いで、引き継いでまいりたいと思います。

本日は誠にありがとうございました。

5) 田中亮平副学長による展示品解説

私からは、展示品の紹介をさせていただきます。

向かって左側のケースには、ゲーテ存命中に発刊された書籍を展示しています。

『若きヴェルテルの悩み』・『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』は初版本です。

また、ゲーテが生前に監修した決定版全集——通称「最後の手になる全集」——全61冊も展示しています。これは40巻までが生前に刊行され、残りは没後に助手のエッカーマンたちによって編集されました。

中央のケース2台と、向かって右側のケースは、直筆書簡9通であります。

うち8通は、ゲーテの子どものうち唯一成人した息子・アウグスト宛のもので、内容も晩年の名作である『西東詩集』や「マリーエンバートの悲歌」に関連する記述を含むなど、貴重なもの

となっています。

どれも印象的ですが、特に1通目、7通目、9通目は興味深いものです。

1通目（1819年8月15日付）は、ナポレオンの失脚後のドイツの新しい体制について、旧体制派と、自由主義派とで、議論が紛糾している様子が書かれています。9月には歴史上有名な「カールスバート決議」に至りますので、その直前の臨場感が伝わる内容になっています。

7通目（1822年8月13日付）は、全文ゲーテの直筆です。ゲーテ書簡の多くは、彼が秘書に口述筆記をし、最後に大文字の「G」のサインを入れたものです。しかし本学所有のこの書簡は、最初から最後までゲーテが直接筆を走らせています。ゲーテが綴った文字から、その勢いを感じとっていただけるかと思います。

最後の9通目（1823年8月24日付）は、ゲーテが晩年、愛する女性ウルリケのいるカールスバートという町へ向かう直前の手紙です。恋が成就することはありませんでしたが、その帰りに名作の「マリーエンバートの悲歌」が書かれることになります。名作の舞台裏をゲーテが息子に語った書簡であり、胸にせまるものがあります。

以上、展示品を概略、お伝えしましたが、最後にゲーテの直筆書簡を取り巻く状況を少しお伝えします。

日本に現存するゲーテの直筆書簡は、他に東京大学、京都外国語大学、天理大学等を合わせても6通であり、本学所蔵の9通は日本最多のコレクションです。うち7通は日本初公開となります。

また、2015年からは、ドイツを中心に研究機関が、世界約200箇所に現存するゲーテ直筆書簡の所蔵・分布情報についてデータベースを構築中です。さらに、ドイツのゲーテ＝シラー文書館では現在、ゲーテの手紙を集めた全38巻に及ぶ書簡全集の刊行に取り組んでいます。

ゲーテの文通相手は、文学・芸術のみならず、哲学・科学・政治など様々な分野にわたる当時の重要人物を網羅しており、18世紀後半から19世紀前半にかけてのヨーロッパ史を知る上で第一級の研究資料となっています。

このようにゲーテの直筆書簡は、幾重にも重要な資料として注目を集めており、目の当たりにできるこの機会をどうか楽しんでいただければと思います。